

contents

何かが変わる日本人のセックス…………… 1	多様な性のゆくえ④…………… 18
朝山新一先生の性教育から学ぶ未来の性教育 …… 11	今月のブックガイド…………… 19
「ありのままのわたしを生きる」ために・その後②…………… 16	JASEインフォメーション…………… 20
思いこみのめがね③…………… 17	

何かが変わる日本人のセックス

【第4回【ジェクス】 ジャパン・セックスサーベイ 2020】結果から

一般社団法人日本家族計画協会理事 北村 邦夫

はじめに

2012年、2013年、2017年に、コンドームメーカーであるジェクス（株）と日本家族計画協会が共同で実施してきた「【ジェクス】 ジャパン・セックスサーベイ」（以降、「本調査」）。その第4回の結果がまとまった。日本家族計画協会では、2002年以降2年毎に「男女の生活と意識に関する調査」を継続して実施してきたが、日本人の性にさらに鋭く迫るために、前回同様インターネットを通じた調査が行われた。紙面の都合上、その結果のすべてを紹介することはできないが、「何かが変わる日本人のセックス」をテーマにまとめた。

都道府県比較を行うために、47都道府県から回収順にしたがって均一に107サンプルを収集し、合計5,029人を集計対象とした。さらに、全国データとして解析するために各都道府県から回収されたサンプルを、実際の都道府県の人口構成比に合わせて集計

◆調査の方法

- 1 調査対象
全国満20歳～69歳の男女 5,029サンプル
- 2 調査期間
2020年2月21日（金）～2月24日（月）
- 3 調査方法
インターネットリサーチ（アンケート依頼メールを各回答者に配信しweb上にて回答）
- 4 調査委託機関
株式会社クロス・マーケティング
※提携パネル：リサーチパネル
- 5 回収結果
①調査配信数 → 73,563人
②回答数 → 5,565人
③有効回答数 → 5,029人
④無効回答数 → 536人
⑤回答率 → 約7%（調査配信数に対して）

し直した（次ページ図表1）。これをウェイトバック法という。大袈裟に言えば、2015年度の国勢調査のうち20歳から69歳の日本人口79,924,215人（男性39,968,568人、女性39,955,647人）の性意識・性行動

図表1 ウェイトバック調整後の各都道府県のサンプル数

合 計	全体		男性		女性	
	5,029 (人)	100 (%)	2,515 (人)	100 (%)	2,514 (人)	100 (%)
北海道	214	4.3	104	4.1	110	4.4
青森県	51	1	25	1	26	1
岩手県	49	1	25	1	24	1
宮城県	92	1.8	46	1.8	46	1.8
秋田県	39	0.8	19	0.8	19	0.8
山形県	43	0.8	21	0.9	21	0.8
福島県	74	1.5	38	1.5	36	1.4
茨城県	116	2.3	59	2.4	56	2.2
栃木県	80	1.6	41	1.6	39	1.5
群馬県	77	1.5	39	1.6	38	1.5
埼玉県	296	5.9	151	6	145	5.8
千葉県	250	5	127	5	123	4.9
東京都	568	11.3	288	11.4	280	11.1
神奈川県	374	7.4	192	7.6	183	7.3
新潟県	89	1.8	45	1.8	44	1.7
富山県	41	0.8	21	0.8	20	0.8
石川県	45	0.9	22	0.9	22	0.9
福井県	30	0.6	15	0.6	15	0.6
山梨県	32	0.6	16	0.6	16	0.6
長野県	79	1.6	40	1.6	39	1.6
岐阜県	78	1.6	39	1.5	40	1.6
静岡県	145	2.9	73	2.9	71	2.8
愛知県	300	6	154	6.1	146	5.8
三重県	70	1.4	35	1.4	35	1.4
滋賀県	56	1.1	28	1.1	28	1.1
京都府	102	2.0	50	2.0	52	2.1
大阪府	351	7.0	172	6.8	179	7.1
兵庫県	217	4.3	105	4.2	111	4.4
奈良県	53	1.1	25	1.0	28	1.1
和歌山県	37	0.7	18	0.7	19	0.8
鳥取県	22	0.4	11	0.4	11	0.4
島根県	25	0.5	13	0.5	13	0.5
岡山県	73	1.4	36	1.4	37	1.5
広島県	110	2.2	55	2.2	55	2.2
山口県	53	1.0	26	1.0	27	1.1
徳島県	29	0.6	14	0.6	15	0.6
香川県	37	0.7	18	0.7	19	0.7
愛媛県	52	1.0	25	1.0	27	1.1
高知県	27	0.5	13	0.5	14	0.6
福岡県	201	4.0	97	3.9	104	4.1
佐賀県	32	0.6	15	0.6	16	0.6
長崎県	52	1.0	25	1.0	27	1.1
熊本県	68	1.3	33	1.3	35	1.4
大分県	44	0.9	22	0.9	22	0.9
宮崎県	41	0.8	20	0.8	21	0.9
鹿児島県	62	1.2	30	1.2	32	1.3
沖縄県	56	1.1	28	1.1	28	1.1

を明らかにしたことになる。

セックスの目的、男性は「性的快楽のため」、女性は「愛情を表現するため」

「これまでにセックス（性交渉）したことがありますか」を尋ねると、男性の86.0%、女性の89.4%が「ある」と回答している。20代、30代、40代では女性の経験率が男性を乗り越えており、若い世代の草食

系男子、肉食系女子の存在を彷彿とさせる。

「あなたがセックスをする目的は何ですか。性交経験のない人はイメージで」と聞いた（次ページ図表2）。男性では「性的な快楽のため」がトップで69.8%を占め、次いで「愛情を表現するため」56.5%、「ふれあい（コミュニケーション）のため」37.1%、女性では「愛情を表現するため」が56.1%、「ふれあい（コミュニケーション）のため」45.1%、「相手に求められるから」27.8%などが目立ち、セックスに対する男女の意識の違いが明確となっている。「子どもが欲しいから」は女性でも26.0%、男性では19.7%に留まっている。これらについては、男女差だけではなく、年代差も顕著であった。

この一年間、まったくセックス（性交渉）がないのは男性41.1%、女性49.5%

「（特定の相手に限らず）この1年間のおよそのセックス回数について教えてください」と聞くと、男性では41.1%、女性では49.5%が「この1年以上していない」と回答（次ページ図表3）。

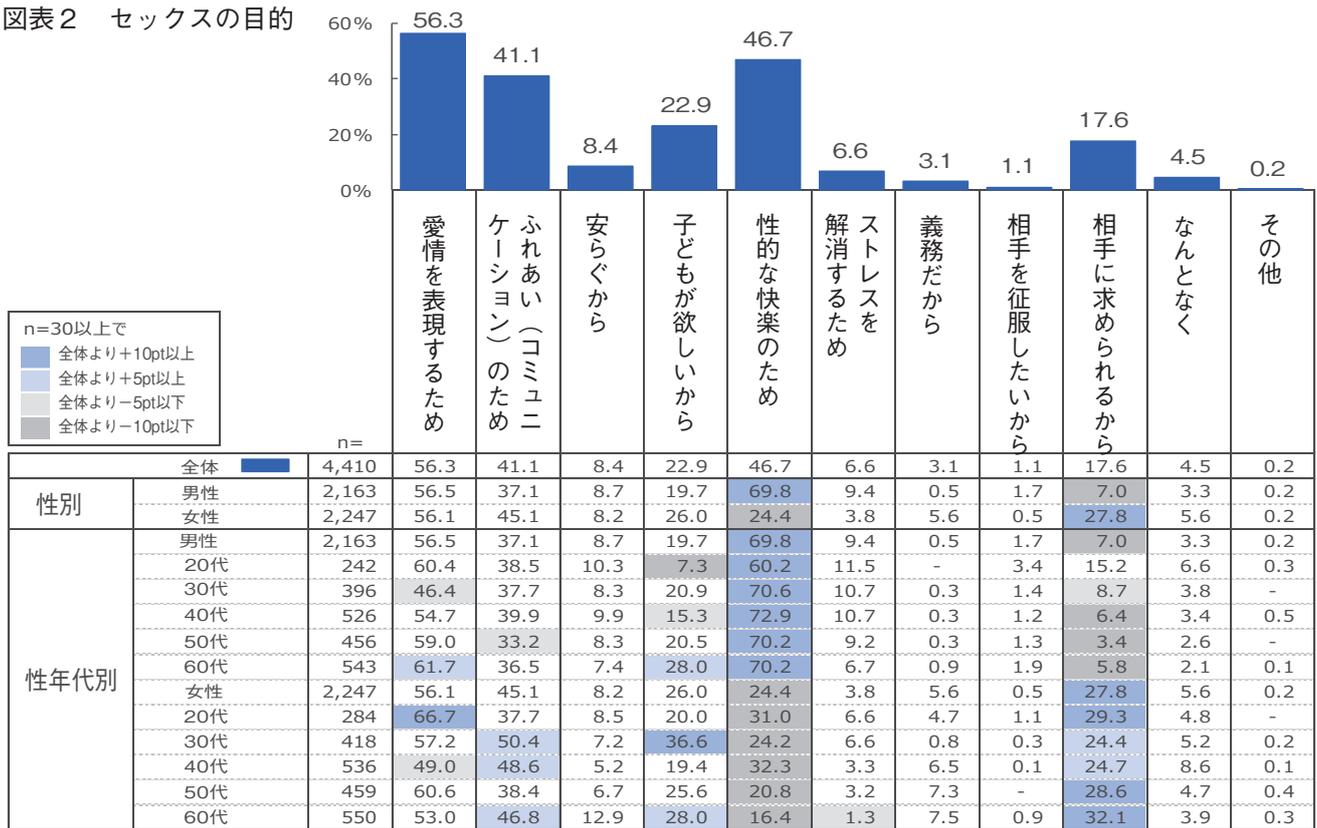
「年数回程度」と「1年以上していない」の和は、日本性科学会（1994年）が定義したセックスレス「特殊な事情が認められないにも拘わらずカップルの合意した性交あるいはセクシュアル・コンタクトが1か月以上なく、その後も長期に亘ることが予想される場合」の範疇に入ることになるが、男性の61.6%、女性の64.2%がこれに該当することになった。

セックスレスは、男女共に年齢が上がるにつれて高く、男性では、20代（33.6%）、30代（51.0%）、40代（57.8%）、50代（69.3%）、60代（79.0%）。女性の場合には、それぞれ33.6%、49.5%、64.4%、79.5%、78.0%となっている。

日本家族計画協会が実施している「男女の生活と意識に関する調査」では、2004年から婚姻関係（初婚＋再婚）にある男女のセックスレス傾向を追跡してきた。対象者は16歳から49歳、本調査は20歳から69歳となっていることもあり、20歳から49歳に年齢を絞り込んだ結果、婚姻関係にある男女のうち51.9%がセックスレスの範疇に入り、傾向が一段と進んでいることがわかる（4ページ図表4）。

さらに、1年以上セックスしていない者に、「どれ

図表2 セックスの目的



2.

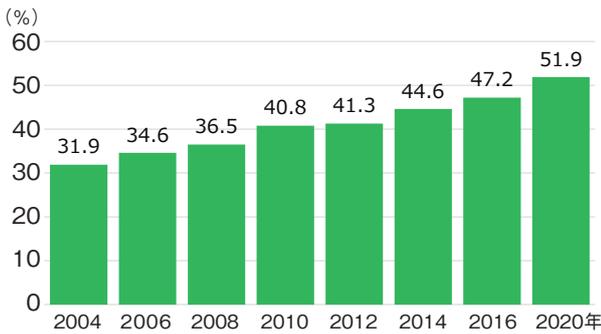
		n=	毎日	週4~6日	週2~3日	週1日	月2~3日	月1日	年数回程度	1年以上していない
性年代別	男性	2,163	1.7	3.7	7.1	13.4	11.2	20.5	41.1	
	20代	242	3.6	4.9	9.9	14.0	14.6	19.5	15.7	17.9
	30代	396	2.2	2.2	5.9	7.3	23.8	7.6	22.7	28.3
	40代	526	1.6	2.7	7.7	16.6	12.3	21.9	35.9	
	50代	456	2.4	2.3	4.4	10.1	11.6	24.0	45.3	
	60代	543	0.1	1.4	5.7	5.0	8.6	16.8	62.2	
	女性	2,247	0.4	4.6	6.2	14.9	8.8	14.7	49.5	
	20代	284	0.2	2.2	15.5	12.5	21.5	14.5	17.3	16.3
	30代	418	0.4	1.5	9.2	8.8	19.0	11.6	18.3	31.2
	40代	536	0.6	2.7	7.0	14.9	10.4	17.6	46.8	
	50代	459	0.1	3.3	8.2	8.1	13.7	65.8		
	60代	550	1.1	0.5	12.5	13.8	2.9	8.6	69.4	

くらい前から」と問うと、男性は平均 8.7 年、女性は 9.6 年という結果だった。なかでも 60 代の男性は 11.4 年、女性は 12.8 年というように、10 年以上、言い換えれば、50 代からセックスとは無縁の生活が続いていることになる。

セックスと射精の回数が同じなのは 23.9% に過ぎない

わが国の場合、セックスストレス化が進んでいるとはい

図表4 婚姻関係にあるカップルで進むセックスストレス化



※2004年、2006年、2008年、2010年、2012年、2014年、2016年は、日本家族計画協会：「男女の生活と意識に関する調査」（調査対象は16～49歳の男女）。
2020年は、第4回ジェクス・ジャパン・セックスサーベイ（調査対象は20～49歳の男女）。

え、一方で射精もないわけではないとの議論がある。今回の調査では、その疑問に迫った。

「射精の頻度について、以下から当てはまるものをお答えください」として、「セックス回数＝射精回数である（自慰や夢精、性風俗利用などはしていない）」「セックスの回数よりも射精する回数の方が多い（自慰や夢精、性風俗利用などをしている）」「セックスはしていないが射精はしている（自慰や夢精、性風俗利用などのみ）」に分類して聞くと、それぞれ、23.9%、36.2%、39.9%となり、射精が純然たるセックスと連動しているのは23.9%に過ぎないことが明らかとなった。割合は、50代（26.7%）、60代（33.0%）と年齢が上がるにつれ高くなっている（図表5）。これらの結果からは、若年世代を中心に、セックスはしてい

ないが、射精はしているわが国の現実が明らかになったとは言えないだろうか。

男性の8割近くがセックスしたいと願っているが、女性は4割に留まっている。

「男性も女性も草食系か」と言われて久しいが、「セックスしたいと思いますか」の間に、男性の77.9%が「したい」と回答するものの、女性は41.4%に過ぎない。男性を年代別にみると、「したい」の割合が平均よりも高いのは40代（85.9%）、50代（81.2%）、女性では20代（60.2%）、30代（57.3%）で、男女間では「したい」年代が合致していない（次ページ図表6）。これでは、同世代のセックスカップルが形成しづらいつらと言わざるを得ない。

「セックスに関して悩みごと（コンプレックスなど）はありますか」（複数回答）には、男性の42.4%、女性の54.1%が「特になし」と回答するものの、30.2%の男性が「挿入時間や射精までの時間が短い」、19.0%が「勃起しづらい・できない」、13.5%が「自分の性器の大きさや形、色などが気になる」と回答。女性では、「オーガズム（絶頂感）に達することができない」（21.5%）、「快感が得られない」（15.0%）を挙げている。年代別にみると、男女ともに50代、60代で「特になし」の回答が目立つが、40代の男性の37.4%が「挿入時間や射精までの時間が短い」を挙げ、「勃起

図表5 射精の頻度 (%)

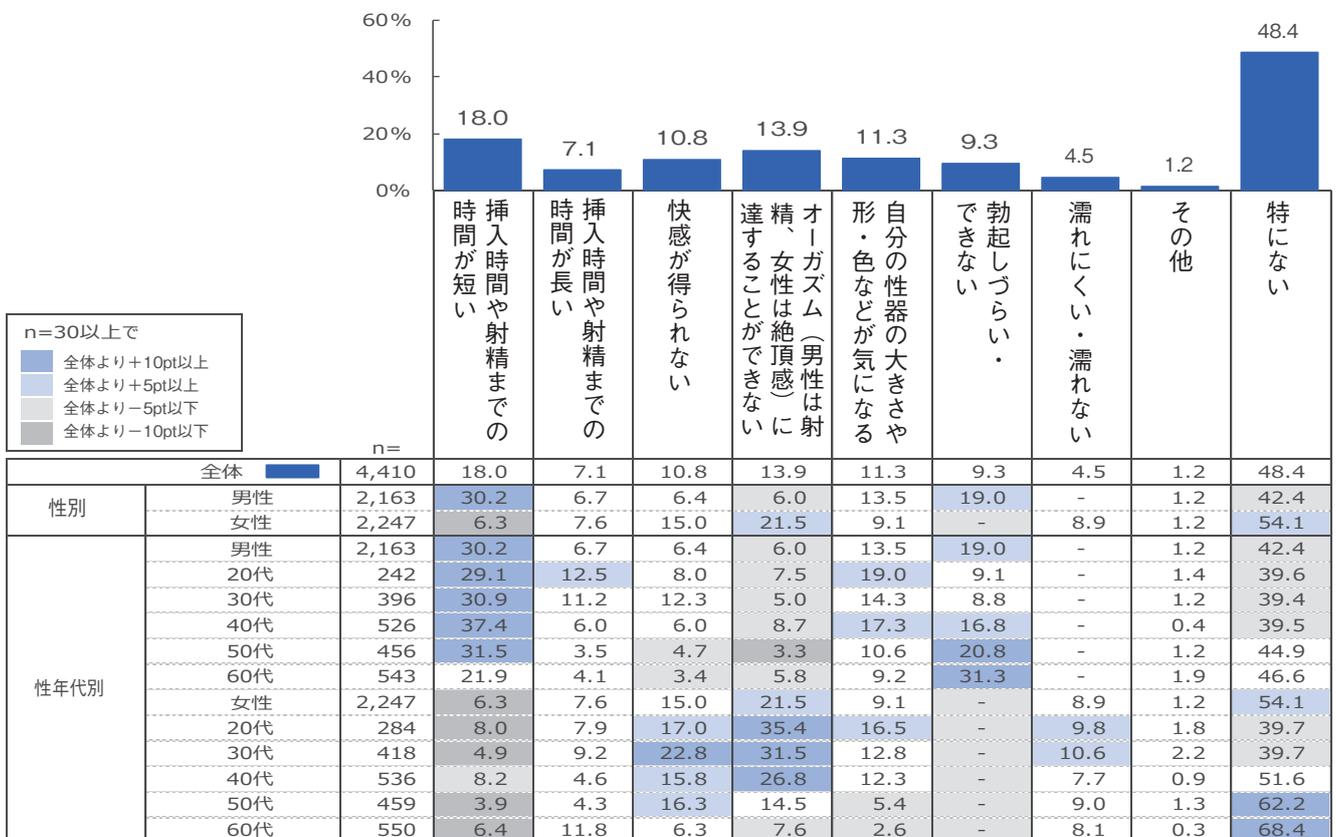
		n =			
		セックス回数＝射精回数である（自慰や夢精、性風俗利用などはしていない）	セックスの回数よりも射精する回数の方が多い（自慰や夢精、性風俗利用などをしている）	セックスはしていないが射精はしている（自慰や夢精、性風俗利用などのみ）	
性年代別	男性	2,515	23.9	36.2	39.9
	20代	397	17.8	30.4	51.8
	30代	496	17.0	44.1	38.9
	40代	583	22.8	42.1	35.1
	50代	484	26.7	34.6	38.7
	60代	554	33.0	28.4	38.6

図表6 セックスしたいか

	性別	n	思う・計 (%)				思わない・計 (%)			
			思う・計		思わない・計		思う・計		思わない・計	
			良く思う	たまに思う	あまり思わない	まったく思わない	思う・計	思わない・計		
性年代別	男性	2,515	36.5	41.4	15.8	6.4	77.9	22.1		
	20代	397	42.0	27.9	16.7	13.4	69.9	30.1		
	30代	496	37.8	39.8	16.7	5.7	77.6	22.4		
	40代	583	43.0	42.9	9.9	4.2	85.9	14.1		
	50代	484	38.0	43.2	13.6	5.2	81.2	18.8		
	60代	554	23.1	49.3	22.3	5.3	72.4	27.6		
	女性	2,514	9.6	31.8	33.2	25.4	41.4	58.6		
	20代	382	18.3	41.9	26.2	13.7	60.2	39.8		
	30代	486	14.2	43.1	31.0	11.7	57.3	42.7		
	40代	574	10.2	38.1	32.4	19.3	48.3	51.7		
	50代	493	3.9	26.8	33.6	35.6	30.8	69.2		
	60代	579	4.2	13.8	40.0	41.9	18.0	82.0		

(グラフの数値は小数点2位を四捨五入したもの)

図表7 セックスに関する悩み・コンプレックス



しづらい・できない」については50代 (20.8%)、60代 (31.3%) で声が上がっている。女性の「オーガズムに達することができない」は20代 (35.4%)、30代

(31.5%)、40代 (26.8%) で高めに、それに呼応するように、30代では「快感が得られない」と22.8%が悩んでいる (図表7)。

図表8 1回のセックスにかかる時間

(%)

		n=	5分以内	10分程度	20分程度	30分~1時間未満	1時間以上	平均(分)
性年代別	男性	2,163	3.5	16.0	33.0	39.1	8.4	31.0
	20代	242	7.7	9.5	25.4	42.3	15.1	34.5
	30代	396	2.3	16.6	27.9	44.3	8.9	32.6
	40代	526	4.9	13.1	32.7	41.5	7.7	31.4
	50代	456	1.6	16.4	36.1	35.8	10.1	31.1
	60代	543	2.6	21.0	38.0	34.3	4.1	27.7
	女性	2,247	4.5	17.6	35.4	36.5	6.0	29.1
	20代	284	1.2	9.9	34.2	39.6	15.1	34.8
	30代	418	2.3	13.4	31.4	47.1	5.8	32.4
	40代	536	1.7	14.9	43.4	33.6	6.5	29.2
	50代	459	6.5	18.6	37.8	33.4	3.7	27.0
	60代	550	8.8	26.5	29.2	32.4	3.1	25.4

仮に短時間であっても互いの満足が得られれば問題がないわけで、早漏や遅漏などの受け止めを関係性として捉えるよう筆者は考えている。オーガズムについても同様で、アダルトサイトで見ると、セックスすれば必ずオーガズムが得られるというのは誤りである。他人同士の行為であるし、環境、体調などによっても変化するわけで、むしろ「気持ちよかったら儲けもの」くらいにセックスのハードルを低くしていかないと、ますますセックスを遠ざけてしまうのではないかと危惧している。

1回のセックスにかかる時間。最長は20代男女、最短は60代の男女

NHKが1999年に実施した「日本人の性行動・性意識」(NHK出版、2002)によれば、セックスの所要時間(お互いに体を触れあってから終わるまで)の分布は、5分以下5%、5~15分くらい22%、15~30分くらい33%、30分~1時間くらい33%、1~2時間くらい7%、2~5時間くらい1%、5時間以上0であった。

この分布をもとに、過去1年間の性体験者1人あた

りの平均時間を計算しているが33分となっていた。どの年齢も男性が女性を超えていた。

99年調査との比較となるが、本調査では男性31.0分、女性29.1分であり(図表8)、20年を経過しても大きな変化はなかった。

セックスを「自分から求める」女性は4.6%に過ぎない

「どちらからセックスを求めることが多いですか」に対して、男性では56.9%が「自分から」と回答。この回答は、年齢が上がるにつれて多くなっている。その一方で、女性では4.6%に過ぎず、20代6.7%、30代6.9%、40代5.1%、50代2.8%、60代2.9%で、わずかながらとはいえ、若い世代ほど「自分から」の回答が増えている(次ページ図表9)。

「どのようにセックスに誘いますか(もしくは誘われますか)」(複数回答)に対しては、「体を触るなどのスキンシップをする」が全体の60.9%(男性58.8%、女性63.1%)、「しよう」と口に出して言う」35.6%(男性42.6%、女性28.9%)、わずかではあるが「お互いで決めた合図をする」の回答もあった。「体を

図表9 セックス、どちらから求めるか

		自分から・計		相手から・計				(%)		自分から・計	相手から・計			
		自分から	だいたい自分から	お互い同じくらい	どちらからもなく	だいたい相手から	相手から	不妊治療中 なので、医師から 指示されている	その他					
性年代別	男性	n=2,163	34.0		23.0		17.7	17.1	4.0	1.9	56.9	5.9		
	20代	242	23.4	20.2	27.7		15.7	8.7	0.8	3.5	43.6	9.5		
	30代	396	24.0	30.7		20.6	15.1	6.4	3.0	0.2	54.7	9.3		
	40代	526	34.3		22.1		18.3	20.6	2.1	1.4	56.4	3.5		
	50代	456	39.6		20.4		13.6	17.2	3.0	2.4	59.9	5.4		
	60代	543	41.0		21.6		14.0	15.6	3.0	3.1	62.6	4.7		
	女性	n=2,247	1.5	11.9	18.4	21.9		36.5		0.7	6.0	4.6	58.4	
	20代	284	1.6	5.0	19.4	15.6		28.8		2.4	0.2	6.7	55.8	
	30代	418	3.2	3.6	21.9	17.3		28.1		25.2	0.3	6.9	53.3	
	40代	536	1.3	3.8	12.3	18.6		23.0		37.1	1.2	5.1	60.1	
	50代	459	1.4	7.8	25.2		15.9		40.7		0.1	7.6	2.8	56.5
	60代	550	0.6	2.3	3.5	14.8		17.7		45.9		15.2	2.9	63.6

触るなどのスキンシップ」が目立つのは、女性の30代(76.6%)、40代(70.1%)、「「しよう」と口に出して言う」のは、男性の40代(47.7%)、女性の30代(37.7%)が目立っていた。

60代の男性でも4割近くが週1回以上のマスターベーションを楽しんでいる

自慰(マスターベーション)の頻度を尋ねると、「したことがない」と回答したのは、男性で5.8%、女性では43.4%。女性では、いずれの年齢も5割以上が「1年以上していない」「したことはない」と回答。自慰については、男性は年齢を超えて高頻度で経験していることがわかる(次ページ図表10)。

自慰行為経験者に「その時に主として使う「オカズ」はなんですか」と聞くと、26.3%(男性13.5%、女性47.8%)が「特にない」とするものの、全体の58.6%(男性75.9%、女性28.5%)が「アダルト動画(実写)」と回答し他を圧倒している。高年代の女性では「特にない」が高率だが、「妄想」という選択肢もあるわけであるから、これとってイメージするでもなく、性

器に触れることを楽しんでいるということだろうか。

男性では、「アダルト動画(実写)」が各年代で高いものの、女性の場合、20代(51.7%)、30代(42.5%)が目立っている。女性の20代、30代では「漫画」を挙げている。

「マスターベーションの際に使用するアイテムはなんですか(複数回答)」と聞くと、全体の90.3%(男性93.3%、女性85.3%)が「手」。「TENGAなどのオナホール」を挙げたのは男性では20代(11.5%)、30代(9.6%)が多く、「バイブやディルド(男性器・陰茎をかたどった器具の呼び名)などの玩具」を使用する女性が12.9%と「手」以外では高率で、特に20代(21.4%)、30代(13.8%)、40代(14.5%)となっている。

デリケートゾーンの悩みに迫る。5割の女性が「ある」と回答

今回、初めて女性にとって「デリケートゾーンの悩み」をどの程度抱えているのか、具体的にはその悩みは何かなどについて聞いた。

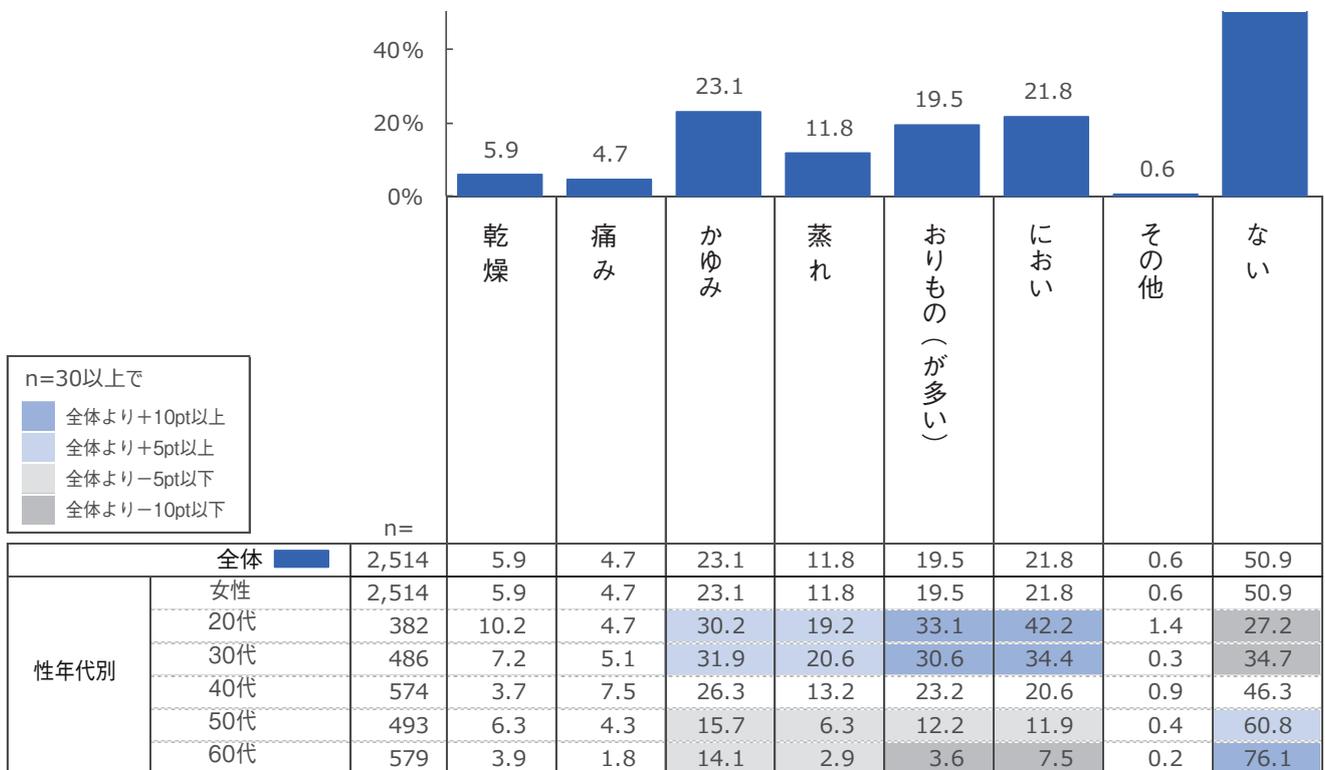
「セックス以外でのデリケートゾーンの悩み」(複数

図表 10 自慰（masturbation）の頻度

(%)

		毎日	週4~6日	週2~3日	週1日	月2~3日	月1日	年数回程度	1年以上していない	したことはない				
n=														
性年代別	男性	2,515	7.9	8.6	21.3		21.0	12.1	6.4	7.0	9.8	5.8		
	20代	397	19.0		18.0		23.3	12.8	6.3	3.9 ^{2.4}	3.0	11.3		
	30代	496	10.6	15.1			30.6	17.9		11.9	2.2	4.4	2.6	4.8
	40代	583	5.4	6.5	24.9			28.3	13.4	6.7	6.1	4.7	3.9	
	50代	484	5.9	4.0	18.7			20.9	14.6	6.7	9.0	14.5	5.8	
	60代	554	1.8 ^{2.4}	10.0	22.3			13.0	11.2	11.9	22.4		5.0	
	女性	2,514	1.2 ^{1.3}	4.7	5.0	6.5	4.9	12.2	20.7		43.4			
	20代	382	2.1	3.9	10.0	7.3	9.5	7.2	9.3	5.0	45.6			
	30代	486	2.7 ^{1.4}	9.2	8.8	9.1	6.4	8.2	15.9		38.3			
	40代	574	0.1 ^{0.9}	15.1	6.8	8.2	5.7	12.1	18.6		42.5			
	50代	493	0.4 ^{1.0}	1.0	1.6	5.7	3.8	13.1	34.2		39.2			
	60代	579	1.2 ^{0.2}	1.6 ^{1.3}	2.4	16.9	25.8		50.6					

図表 11 セックス以外でのデリケートゾーンの悩み



回答)を尋ねると、5割の女性が「ない」と回答するものの、「かゆみ」(23.1%)、「におい」(21.8%)、「おりもの」(19.5%)、「蒸れ」11.8%などの悩みがあることがわかった。これを年代別で見ると、いずれも20

代、30代での悩みが深刻であった(図表11)。

「デリケートゾーンの悩みはいつ感じる事が多いですか」(複数回答)を尋ねると、「生理中」(30.4%)、「疲れているとき」(26.9%)、「生理前」(26.1%)、「常

に」(22.7%)の順。年代でみると、20代、30代、40代は「生理」中前後で多く、50代、60代は「疲れているとき」と回答。「デリケートゾーンの乾燥を感じる頻度」は、35%の女性が「ある」と回答。20代が43.9%で最多。「感じたことはない」は40代が71.9%。

「デリケートゾーンのケアの必要性を意識したことがありますか」と聞いた。女性の52.9%が「意識する」とするも、その割合は20代で74.8%と高く、60代は35.1%と低くなっている。また、「おりものやニオイによるデリケートゾーンの不快感がある」とした者も、20代(61.0%)、30代(65.1%)で高率で、年齢が高くなるにつれ、デリケートゾーンへの関心が低くなっているような印象を受けた。

それでは、「デリケートゾーンに不快感がある」と回答した女性ではどのようなケアがなされているのだろうか。「特に何もしない」の回答が26.3%いるものの、ケアのトップは「ウォッシュレットのビデ機能」で34.4%、次いで「ボディ用ソープ」28.6%、「お湯または水ですすぎ洗い」28.1%。「ウォッシュレットのビ

デ機能」を使う頻度が高いのは40代、50代。「ボディ用ソープ」や「お湯または水ですすぎ洗い」は若い世代で多く認められた。

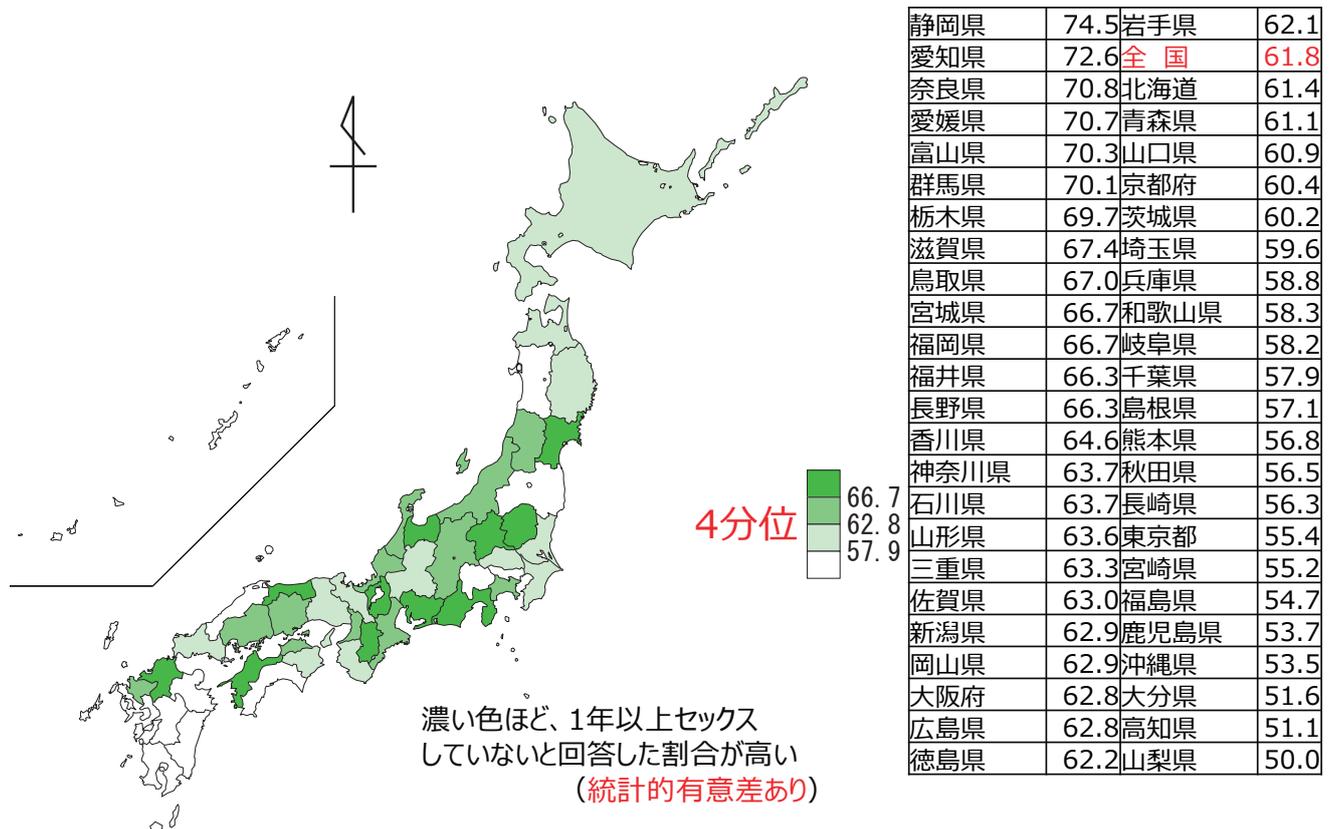
性の実態調査、都道府県別にみた特徴とは？

今回の調査では、都道府県比較を行うために、47都道府県から回収順にしたがって均一に107サンプルを収集。合計5,029人を集計対象とした。

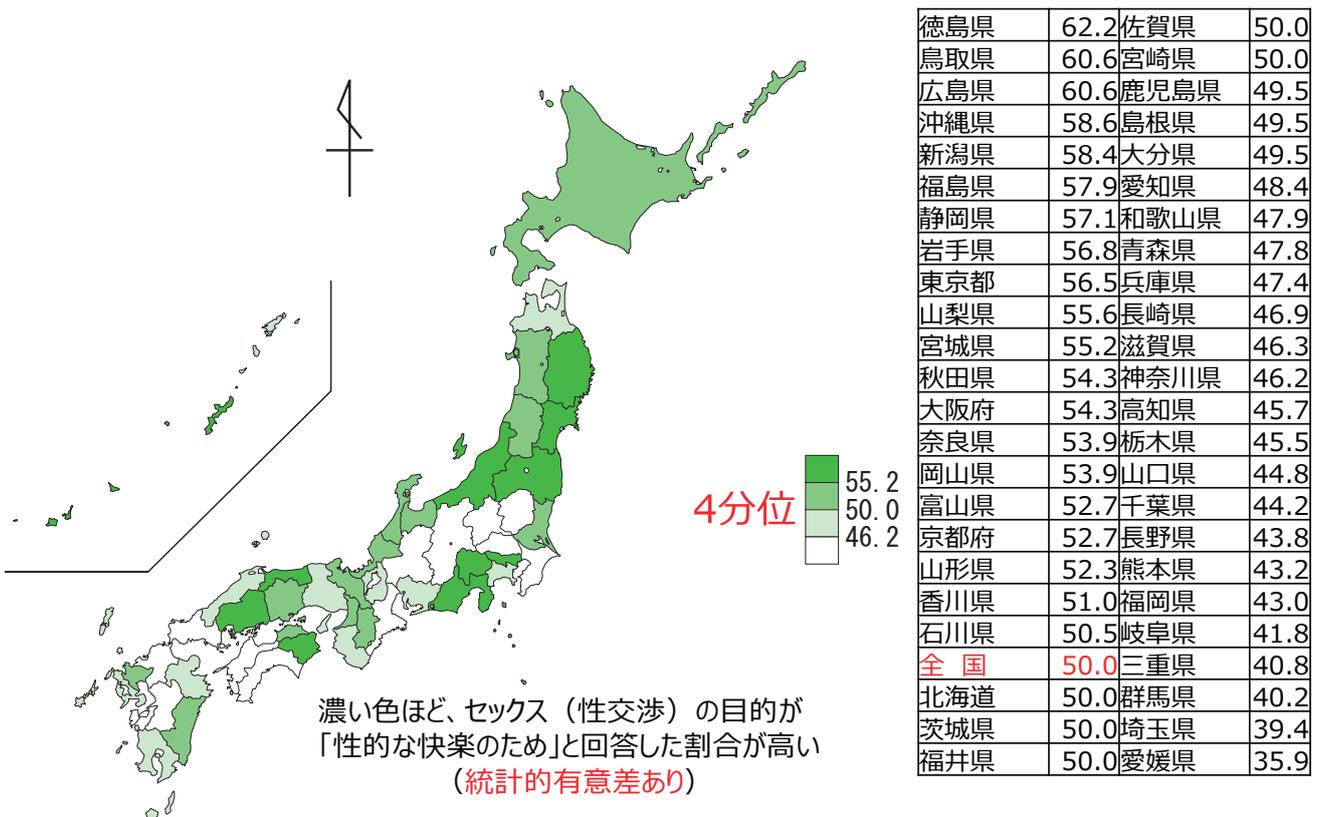
都道府県マップについては、4分位数で色分けしている。データを小さい順に並べて、下から1/4のところのデータを第1四分位数、2/4のところのデータを第2四分位数(これは中央値と同じ)、3/4のところのデータを第3四分位数という。

興味深いデータは多々あるが、「この1年間でセックスレス(1か月以上セックスしていない)の割合」(図表12)と「セックス(性交渉)の目的が「性的な快樂のため」と回答した割合」(次ページ図表13)の2点についてのみ、マップを提示したい。

図表 12 この1年間でセックスレス(1か月以上セックスしていない)の割合



図表 13 セックス（性交渉）の目的が「性的な快樂のため」と回答した割合



おわりに

「第4回【ジェクス】ジャパン・セックスサーベイ2020」の結果をまとめながら、「何かが変だぞ」と真剣に考えることとなった。

筆者が「何かが変だぞ」と感じた点を以下列挙した。

従来からよく言われていることだが、セックスの目的については、男女差が顕著であり、これでは互いの合意の上のセックスは夢のまた夢ではないだろうか。

日本家族計画協会が過去に実施してきた「男女の生活と意識に関する調査」とは方法、対象者が異なるから、単純には比較できないが、婚姻関係にある者のセックスストレス化が一段と進んでいることに驚かされた。本調査ではその理由まで聞いていないが、日本人は既にセックスを必要としなくなったのではないか。

「セックスしたいか」の問いに対しても男女差が著しく、「したくない」女性の気持ちをどのように懐柔し、「したい」男性の思いをどのようになだめるのか、それとも受け止められるのか。セックスストレス化は婚姻

関係にあるカップルだけの問題ではなさそうだ。

セックスは対等な関係の営みだ、「合意」に基づいて行われるべきだと強調するが、「セックスを求めるのが男性の仕事」であるかのような現状をどのように変えていくことができるのだろうか。その結果というべきだろうが、避妊を男性任せにしている女性の避妊行動を変えることができない。「女性から求めてもいいのだよ。だからこそ、避妊を男性任せにするな」の教育が必要ではないだろうか。

計画外の妊娠や性感染症から完璧に解放される道として、自慰（マスターベーション、セルフプレジャー）の意義を語ることが多いが、コミュニケーションの極致とも言えるセックスを避けた射精を繰り返すことで本当にいいのだろうか。

筆者が懸念している「何かが変だぞ日本人のセックス」について、読者の皆さんからの率直な意見をお寄せいただけますれば幸いです。

※一般社団法人日本家族計画協会家族計画研究センター
kitamura@jfpa.or.jp

〈日本性教育協会創立 50 周年記念・特別寄稿〉

朝山新一先生の性教育から学ぶ未来の性教育

公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター 宇野賀津子

大学での朝山先生の性教育講義

朝山新一先生（以降敬称略）は、大阪市立大学の教授で、私が 1968 年に大阪市立大学理学部生物学科に入学した当時は、大学ではメダカやニワトリを材料として性の分化の研究をしていた。私の入学時は大学紛争の最中、小さな学科だったので、講義以外にも学生でも教授等と議論することもあった。

朝山は日本性教育協会の創立者でもあり日本のキンゼイとも呼ばれていた。1971 年に定年退職、私は彼の発生学の講義を受けた最後の学生ともいえる。これはとても大切なことだからと、発生学の講義とは別に、「人間の性」という講義を数回にわたって受けた。休講の時間ができると講義を頼みに行った。すると手製のスライドを持ってこられ、講義、1967 年に出版された中公新書の『性教育』に書かれた内容が中心であったかと。この時代、性に関する情報は、『家庭の医学』くらいからしか得られなかったので、性を正面から語る講義は私にとってとても新鮮であった。そして同時に私は「性の科学」に興味をもった。

朝山の講義が魅力的だったのは、単に動物の性でなく、人の性が語られていたこと、そしてその講義には一貫して人の生き方が語られていたからであると思う。『性教育』を読み返してみると、教育の三つの条件として、1) 個人の遺伝素質の担っている可能性を引き出し、育てること：【素質の開発】、2) 社会・経済生活を満足させ、社会の機能に参画する為の知識と機能と習得さすこと：【学習】、3) 理想とする社会を担い、さらに発展させるためにふさわしい行動ができるよう、子どもたちの行動をしつける、社会習慣習熟のための【訓練】である、としている。

そして、人間教育の成功のためには、この三つのバランスが重要としている。今なお、新鮮にこの言葉を

受け止めることができる。

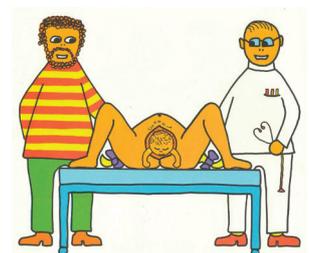
ドイツの性教育

残念ながら、私が 4 回生になって、発生学教室に入ったとき入れ違いに朝山は定年退官。その後、4 回生の夏、交換留学で行ったドイツで、ドイツの両親は、子どもの年齢に応じた性教育の本を誕生日に送るということを知った。子どもの本棚に並んでいた数冊の本に興味をもち、古くなった物を譲り受け、一部は買ってもらって持ち帰った。

先生に見せたらとても喜ばれて、比叡平の自宅に招待いただいたりした。今もってこれらの本を読み返せば、まさにドイツの性教育や生物の教科書には、小学生用といえど、ヒトの性中心に科学的事実が書かれていた。更に、後日ドイツの母が送ってくれた本の中には、デンマークの P.H. クヌーセンの本の Sådán får man et barn (1971 年) のドイツ語版 (Wie Vater und Mutter ein Kind bekommen, 1973 年刊) もあった。

このドイツ語版は 10 年近く経って『あかちゃんはどうしてできる』P.H. クヌーセン (1982 年) として日本で翻訳出版された。私はこのドイツ語版を 1980 年頃、娘の性教育に使ったし、娘の保育園でも妊娠した保母さんが子どもたちに読み聞かせて活用した (性教育セミナー「保育者と父母への性教育実践例」1980 年)。

初刊本は、出生時赤ちゃんは目を見開いてバアーッという調子で出てくるが、1979 年に私がデンマークから取り寄せた本 (第 3 版) は、赤ん坊が眼をつむって出てきていた。絵本といえどもよりリアルに書かれていた。



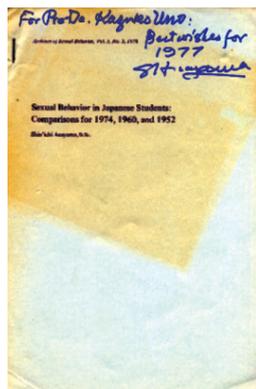
京都での朝山との交流

私は1973年に大阪市立大学の生物学科から京都大学の大学院、動物学教室に入学した。何倍かの倍率だったと思う。一番喜んでくださったのは、実は朝山であった。後日知ったことであるが、朝山は今度うちの学生が入学するのでと、そのころすでに動物学教室から新設の生物物理教室に移動されていた、発生生物学の後輩の岡田節人先生に、わざわざ挨拶にいかれたとのことである。私が入ったのは、氏の卒業された動物学教室の発生学教室であったが。そして、京都で朝山との交流が深まる。

その頃、朝山は比叡山の中腹の新しい住宅街、比叡平に住んでおられた。比叡平行きのバスは、ちょうど京大理学部に近い百万遍を通るが、日に数本で、午後3時の次は5時でそれが最終であった。そこで、バスの待ち時間があるとよく、発生学教室にこられた。私はそこで、いろいろな話を聞いた。それこそ生物学一般から、性の話にいたるまで、いろいろである。今から思うとのんびりした時代だったと思う。

時々、はがきが舞い込んで、〇月〇日、研究会がある、講演する、とかの案内がきた。ひょこひょここと出かけていくと、主催者に紹介して下さり、学生ということで参加費も免除されて参加した。ともかく、いろいろな方を直接紹介いただいた。その中には、日本性教育協会の理事メンバーの、村松博雄、篠崎信男、間宮武、黒川義和、荻野博氏等も含まれる。今にして思えば、院生が直接これらの先生とお話できたのは、とても光栄?なことであったと。

朝山に言われたことで、「何でもよい。ドクターをとれ」と「多方面から勉強しろ、性科学はそれからでも遅くない」は特に印象に残っている。亡くなる前の年にいただいた論文別づりには「For Pre-Dc, Kazuko Uno: Best wishes for 1977 S Asayama」とある。この論文は朝山の仕事として、歴史に残る重要なものである。朝山は、満州からの引き揚げ船のなかで、戦後の大きな変化を予測し、性行動調査をしようと決意したと何度も聞いた。この研究は、今な



お6年毎に、日本性教育協会の重要な事業の一つとして進められている「性行動全国調査」である。

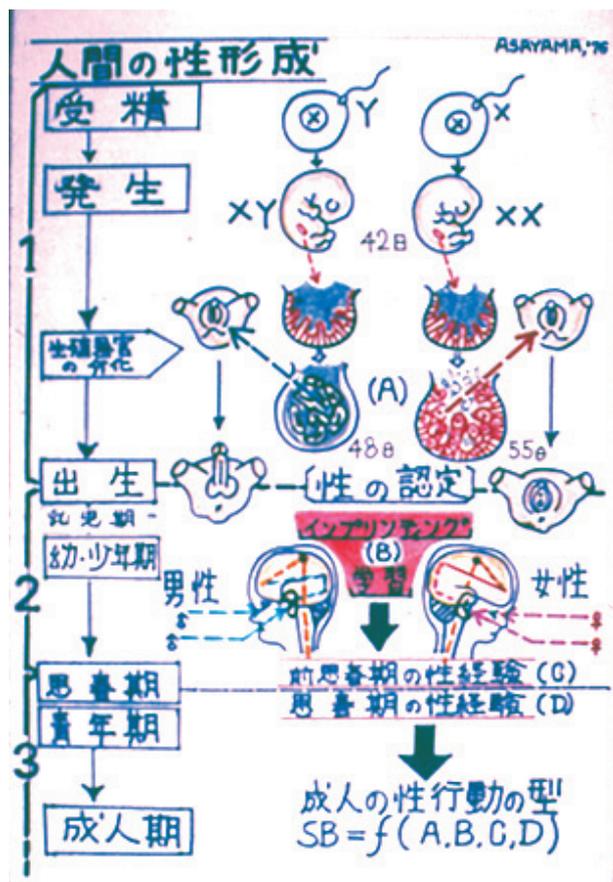
また、スライドの図は科学的に正確で、美しい図、わかりやすい図でないといけなかったと言われた。何枚かのスライドはおねだりして、写させていただいた。その時はあまり気づかなかったが、性分化の図は今では朝山の性分化に関する考えを推し量ることができて、特に興味深い。今なお、使える図である。

もう一つ言われたことは自分の言葉で語れと言われた。マニュアルに頼るな、とも言われた。学校関係者中心に性教育指導要綱を出そうとしたときは、日本性教育協会の理事をやめるとえらく立腹された。当時の日本性教育協会事務局長が、先生のご自宅まで説得にこられた。私は、それが何故だめなのか、ずいぶんと聞かされた。要するに、性の教育というのは安易にマニュアル化すべきものでなく、教師それぞれが、自分のものとして語るべきだとの考えからだったと思う。

朝山とJ.マナー

1974年の国際会議から帰ってきた朝山は、とてすごい発表があったと興奮気味に話された。それは、ペニスを失った男の子を、女兒として育てたJ.マナーの報告であった。私は小さな研究会で、先生からJ.マナーの紹介した写真とともに、デビッド・ライマーの写真のみた。かわいい服を着、ポーズした写真であった(マナーの発表の様子を写したスライドであった)。ともかく、朝山は、J.マナーの仕事を高く評価していたことは確かであった。そして、出生後18か月ぐらいまでの教育は、その後の性自認に特に大事と言った。

そしてその後J.マナーとP.タッカーが出版した本、「Sexual Signatures on Being a Man or a Woman」を朝山が翻訳することになる。ところが朝山は1978年に国際性科学学会から帰国後、急逝する。翻訳途上で先生が亡くなったので、息子さん夫妻によって翻訳は引き継がれ、人文書院から『性の署名』として出版された。ただ、朝山からは生後の育て方も大事と聞いたが、J.マナーのように、全く白紙の状態で子どもは生まれてきて、生まれてから心の性は決まると聞いた記憶はない。その後、1976年に作られた朝山のスライドをみて、私は、やっぱり朝山は基礎の科学者であったと思ったしだいである。



上図は、朝山のスライドを映させていただいたもので、朝山が最後まで使っていた図である。成人の性行動の型 = $f(A, B, C, D)$ と書かれている。

- A: 胎児の性（精巣、卵巣）
- B: 生まれてからの学習、インプリンティング
- C: 前思春期の性体験
- D: 思春期の性体験

その後、性の決定は、生まれる前か、生まれてからの論争（男と女の違いは、どこまでが生得的で、どこからが環境によってつくられたものか「Nature or Nurture」論争）は、1970年代後半から1980年代になると、ジェンダーフリーの運動と相まって盛んとなる。この頃フェミニストやジェンダーフリー論の科学的証拠とされてきたのは、文化人類学者のマーガレット・ミードの部族社会毎の「男らしさ・女らしさ」の逆転例と、J. マネーによって示された「双子の症例」であった。従って、朝山が訳した『性の署名』はジェンダーフリーの運動のバイブルの書籍となっていた。朝山の死後、J. マネーの報告にとっても感銘を受けたと言ひ、本の翻訳の約束もされた一方で、同時期作ったスライドに、生まれる前の段階での影響をきちっと書

かれていたことを改めて確認した時、私には感慨深いものがあった。朝山はやはり生物学者であり、科学者であったと。

その後、1982年に英国メディアのBBCがドキュメンタリーの中で「マネーの双子」症例への疑問を提起し、この子は思春期よりジョンズ・ホプキンス大学での治療を拒否し、当時、男性（John）として生活していることを明らかにした。1995年に第12回世界性科学学会が横浜で開かれ、J. マネーも来られたが、「マネーの双子」については、一切答えられなかった。この話は後に日本でも、J. コラピントの邦訳本が『ブレンダと呼ばれた少年』（無名舎、2000年）として出版された。これはあまり注目されなかったが、その後、ジェンダー・フリー・バッシングの動きと共に、再度2005年に扶桑社から復刊される。「生後8ヶ月の男の子がモルモットにされた！」という帯封とともに、ジェンダーフリーの「嘘」を暴いた本書の意義という八木秀次氏のコメントが加えられていた。この子は15歳で男に戻り、25歳で子持ちの女性と結婚、そして2004年に38歳で自ら命を絶ったということも聞いた。J. マネーはこの件について、晩年何も語らなかった。一説には家族から、話すのを止められているらしいと聞いたこともある。

「女性とは何か」との出会い

一方、私は、『Le Fait Feminin』（1978年刊）の翻訳にかかわることとなる。社会学者のE. シュルロとO. チボー中心に、ノーベル賞受賞者のJ. モノーの後押しで、世界中の「性」の研究者を一堂に集めて1976年パリで開いたシンポジウムの報告集である。女性研究者仲間のフランス文学者西川裕子さんが、『性の署名』に続く本として、人文書院から頼まれたとか。生物医学的な内容の検証を手伝ってほしいと、声をかけられ参画する。当時私は京都大学理学部の動物学教室の院生であったが、周辺には、動物行動学の日高敏隆、生態学の川那部良哉、人類進化論の伊谷純一郎がいて、いろいろと動物の生態を聞いていた。

私が大学院生のころは、マネーの話や、男女共同参画、女性のエンパワーメントの動きがあり、性差を認めることは時代に逆行するという雰囲気があった。しかしながら動物学教室では、性差と言うのはあって当たり前のものであり、特に極端な性差否定論には、多

くの研究者は辟易していた。特に日高敏隆先生は語学に堪能なことから、よく動物の名前を聞きに行き、性差について議論した。動物学をしていたら、性差は大なり小なりあってあたりまえ、性差が無いとやっきになって否定するのはいかなるものかな、という考えで一致した。

この本は『女性とは何か』と題して1983年に発刊される。性差が世界中で話題になっていたときに、性差を認めることは女性にとってどうなのかということ議論するために、多分野の専門家を一同に集めて開かれた（シンポジウムの時にはJ. モノーは亡くなっていた。後日、パリのパストゥール研究所の研究者からこのシンポジウムのことを聞いたら、いろいろな個性がぶつかり、皆ゆずらない、大変なシンポジウムだったと言われた）。このシンポジウムにはJ. マネーも呼ばれているが、ここでは双子の症例についてはふれていない。この本の序文でシュルロは「このシンポジウムを開いて分かったことは、文化的事実を変えるより、自然に関する事実を変える方がやさしい。すなわち、父親を育児に巻き込むには、人工乳の開発をして女性を授乳義務から解放する方が易しい」と述べています。

私もそう思い、その後の私の講義でも、生物学的視点、歴史的視点、社会学的視点から女性とは何か、性差について考える授業を、25年にわたり、今なお京都大学の医学部人間健康学科で講義を続けている。本の中でシュルロは「私は次第に、特に生物学的な性差の事実の考慮を拒否し、婦人問題を論ずるという非科学的な態度は危険だと思うようになりました。現実を避けて通って、勝手な解釈をするグループを増やしてゆくと袋小路に入ってしまうという危険を感じたのです。そしてついには、生物学の専門家と協力して議論を深めたうえでなければ、いかなる考察もできない、ましてや理論の構築は不可能という結論に達しました。」と。

1983年にこの本が発刊された時、私たち翻訳者はある女性グループに呼ばれて講演したことがある。話の後、ある女性が「性差は無いと言って運動してきたのに、性差はあると言われるとこれまでの論拠が無くなる！」と涙ながらに言われた。その時こられていた、当時から女性運動のリーダー的な方は「私は性差が無いと言う方が運動が進むなら、無いといい、ある

という方が運動が進むならあると言う」と言われました。その時私は、ジェンダーフリーの理論的裏付けって、そんな程度なのと思って、少しむっとしたのを覚えています。この言葉は後の日本でのバックラッシュの動き、科学に基づいた最低限必要な性教育さえでなくなった動きと併せて考えるときとても、重要かと思う。

ジェンダーフリーとバックラッシュ

実際、2001年頃から性教育に対する攻撃が強くなる。財団法人母子衛生研究会が作成した『ラブ&ボディ Book』は避妊について性行為を必要以上に許容する印象であり、教材として不相当と東京都が問題にしたのを手はじめにバックラッシュがきつくなり始めた。また、2003年東京都立七生養護学校（日野市）の性教育を巡り、都教委が「不適切な性教育をした」と教員13人を嚴重注意とした。同校では知的障害児に分かりやすい授業をしようと、性器の名称が入った「からだうた」を歌ったり、人形を使ったりする性教育が実践されていた。この活動は過激な性教育の典型例と紹介され、「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム委員長、安倍晋三」等により批判されたのです。

特に2005年頃から過激な性教育、ジェンダーフリー教育に対するバックラッシュがきつくなる。『ブレンダと呼ばれた少年』が復刊されたのも同時期であった。そして、学校現場で避妊はおろか、性について語る事が困難となる。都立七生養護学校の教員処分については、2009年には東京地裁で「都議らの行為は政治的な信条に基づき、学校の性教育に介入・干渉するもので、教育の自主性をゆがめる危険がある」として七生養護学校側が勝訴し、2013年には最高裁判所が上告を棄却し判決が確定している。しかしながら、2005年以降、最小必要限の性教育さえ、難しくなり、ユニークな性教育を行っていた方々の動きが鈍い、今なおその状態は続いているかと。

私自身は、バックラッシュに弱かったのは、科学に基づかない、ジェンダーフリー教育そのものに、弱みがあったと考えている。真実を見る目を曇らせたとき、科学は、その本来の精神を失い、墮落の道を歩むことになる。運動論としてジェンダーフリーを叫んだ方が運動が進むと考えた人たちがいたことも、攻撃の

口実を与えたことは事実であろう。結果的には科学的・生物学的事実である性についての教育さえ、また子どもたちに最低限必要な性の知識さえ学校教育の場で語ることはできなくなってしまった現状がある。その事例として性差をめぐる「nature versus nurture」論争の経緯、さらに科学的事実を飛び越したジェンダーフリーの言葉の一人歩きを、真摯に受け止め、これからの糧としなければならないだろう（『現代性教育研究月報』2006年1月号「官製「ジェンダー」が降りてきた！—「ジェンダー」「ジェンダーフリー」の定義をめぐる闘争と行政・女性学・女性運動—山口智美）。

40年ぶりの、朝山資料との出会い

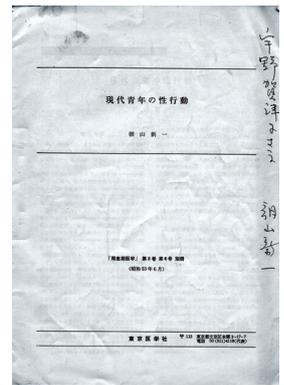
平成30年の夏、国立民族学博物館で朝山の残された数々の資料と出会うことになる。朝山の書斎の資料が国立民族学博物館に梅棹忠夫先生がおられた関係で一括して寄贈されたのは、朝山が亡くなられた直後からお聞きしていた。JASE 運営委員の片瀬一男先生から第1回の性行動調査の資料がJASEにないと聞いたとき、国立民族学博物館にあるかもとお教えした。いくつかの伝手を辿って、関係の人へ問い合わせをしたら、国立民族学博物館から朝山の資料が存在すると返事をいただいた。

博物館に行き、いくつかを開けてみると懐かしいスライドの原図などもあり、後日、片瀬先生や中山日本

性教育協会事務局長等と博物館を訪れ、箱を一つ一つ開けて中身をチェックした。遠い記憶にあった、朝山の書斎にあったものが全部そのまま移動して保管されているという雰囲気、性行動調査の一部や、それ以前のガリ版刷りの調査用紙もあり、私が持っていたいくつかのスライドの原版もあった。更に1975年に発刊された『青少年の性行動』という調査報告書の表紙には、集計法の不満や、学生とすべきであるのに青少年としたのはけしからんと書かれていた。現在、この資料整理はコロナ禍で中断している。資料の整理のなかで、朝山の考えていた性科学に迫ることができればと考えている。

多分、当時日本性教育協会内部でも、科学としての性科学をと考えていた朝山と、学校現場での性教育の普及を考えていた委員の方々に対する意見の対立があったように思う。ジェンダーフリー教育が、批判に弱かったのは一部科学でなく運動論として性差を否定したことも一因ではないかと。

この原稿をまとめて思ったことは、朝山がこだわった科学としての性科学にもとづいた、性教育を今一度考える時期にきているのではないかと。



JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】 必ず事前に電話で予約が必要です (tel 03-6801-9307)。貸出業務は行っていません。

【開室日・時間】 月～金曜日 10:30～17:30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<https://www.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>

「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

第2回

「小石になりたい」

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

教員になって4年目のある日、授業を担当しているクラスにいるNという在日の生徒に「上履きに書いてある名前、きみの本名？」と声をかけました。それは、教員になってはじめて在日の生徒に声をかけた瞬間でした。

大学時代、キリスト教の教会の先輩から「教員になるんだったら在日の子とかかわれ」と言われていました。しかし、いざ教員になってみると「かかわるって何？」状態が続いていました。なんの関係もないのにいきなり「きみ、在日やんな」なんていう会話ができるはずありません。かかわらなきゃならないけど、声をかけることすらできない。そんな悶々とした日々が3年続き、4年目ようやく在日の子がいるクラスを担当することができたのです。

その声かけ以来、通名を名のってるNに本名をうながしてみたり、家庭訪問をしてアボジやオモニと話をしたりというつきあいがはじまりました。しかし、そのかわりは、最終的にNから関係を切られてしまうような中途半端なものでした。それ以来、かかわる限りは、その子の一生を面倒みるくらいの覚悟でなきゃならないと思うようになりました。

Nが卒業した翌年、今度はRという在日の生徒を担当しました。Rと一緒に在日の子が集まる社会科学部というクラブをつくったり、家庭訪問に行き焼肉を食べさせてもらったり、それなりのかかわりをしていたつもりでした。しかしRも担任からはずれた翌年には関係が切れてしまいました。いったい自分の何がダメだったのか、真剣に悩みました。

それでも新しい生徒は入ってきます。Rの卒業と入れ替わりにSという在日の生徒が入学して、わたしは担任をすることになりました。Sをクラブに誘ったのはいいけど、何をやるかと思いました。ハンゲルの勉強も歴史の勉強も、大切だけどあまりおもしろくありません。そこで思いついたのがチャンゴでした。チャンゴはひとりではできません。日本人の子も含めていろんな生徒に声をかけて、10人ほどのクラブになり

ました。当時チャンゴを叩いてる高校生は京都では珍しく、これをきっかけに他校の生徒とのつながりができました。このつながりが、Sの卒業後、京都在日外国人生徒交流会の立ち上げへとつながりました。1994年のことです。

交流会をはじめた当初、「交流会を主催する以上、自分が生徒を連れていかねば」と、必死で在日の生徒を誘っていましたが、しかし、そんな誘い方をしても生徒が来るわけがありません。生徒が来ないと焦ります。焦って生徒を誘っても来てくれません。悪循環でした。そんなわたしを見て、一緒に交流会をしている教員が「交流会という場をつくってくれてるんやから、ええやん」と言ってくれました。いつしか、「交流会を続けるだけでOK、誘った生徒が来てくれたらラッキー」というスタンスに変わりました。

交流会は思わぬ出会いをもたらします。例えば、Tという日本とロシアのダブルの生徒が参加したことがあります。中国帰国生徒のYの「家の中は中国。ドアを開けたら日本」という話を聞き、Tは「そうそうそう、一緒一緒！ 自分も家の中はロシアで、ドアを開けたら、日本」とうれしそうな顔を見せてくれました。

かつて「この子らの面倒、一生みなきゃ」と思っていたわたしは、いつの頃からか「小石になればいいや」と思うようになりました。「面倒、一生みなきゃ」なんていう大きな石は、子どもたちははよけていきます。小石の持ち味はフットワークの軽さです。子どもが歩いている前に、気づかぬうちにチョロチョロと出ます。生徒は「わたし」という小石をけとばしてちょっとよろけます。でも、「おとっと」とバランスをもどした時、ほんの少しだけそれまでとは違う方向へと歩みを進めます。すると、それまでの歩みでは出会えなかった「誰か」と出会います。その誰かとの出会いは、きっと次の出会いへとつながっていきます。

わたしの役目は、子どもたちが自らの力で誰かと出会っていく、その最初のきっかけづくりでいい。そんなことを思いながら、今も交流会を続けています。

思いこみ の ゆがね

シゲせんせーのポジティブライフ

鈴木茂義 Suzuki Shigeyoshi



公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

うだるような暑さが過ぎ去り、気が付けば秋。朝晩の肌寒さに、季節の変化を感じます。どんな社会状況や世界状況の中でも、自然の営みは変わらないと感じています。

先月のことです。送られてくる本紙を読んでいて、「あ！」と思いました。私がこのコラムを書くきっかけの一つにもなった、土肥いつきさんのコラムが再開しています。とても嬉しい気持ちになりました。私としては、本紙コラムを引き継いだという意味でも、バトンをつないでもらった気持ちがあります。今回いつきさんと本紙で肩を並べることは、「並走する」とか「伴走する」感じに近いなと感じました。要するにいつきさんのコラムが読めて嬉しいのです（笑）。仲間の息遣いが近くに感じられるだけで、安心するものです。それはセクシュアルマイノリティにも通ずるものがあると思います。

LGBTQの方への「支援」「連携」「協働」「仲間」を表明するアライ（Ally）の存在も昨今、可視化が進んできています。私が自分の生活圏内の中でカミングアウトしても、ポジティブな反応を示されることが増えてきました。職場の同僚から「最近は何パートナーの人とどう？」とカジュアルに聞かれることすらあります。また、ダイバーシティ&インクルージョンを核とした企業の取り組みをみても、社員や当事者グループの中でのアライの存在も注目されるようになってきました。様々な企業の方とご一緒することも増えてきましたが、教育現場以外の取り組みについても非常に勉強になる毎日です。

またこの時期になると、大学生から連絡をもらうことが増えます。それは「卒業論文でLGBTQやSOGIについて研究したい」というものです。話を聞いてみると「実は自分も当事者で」という大学生もいれば、「自分はシスジェンダーの異性愛者で、アライです」という大学生もいます。当事者性があってもなくても、身近な社会課題について問題意識をもってくれ

ることを頼もしく感じます。

こういったアライの方と話をする度に、ふと我に戻ります。「自分はLGBTQに関する活動は当事者性があるって取り組んでいるけれども、他の社会課題について関心をもっているだろうか」「自分は誰かのアライになっているだろうか」と。

インタビュー形式で卒論の取材を受けていると、私自身もいろいろなことに気付かされます。先日、ある大学生とメディアとLGBTQをテーマに話し合っていました。ちょうど女性差別と思われる発言とその報道がなされていた時期で、私は怒りを感じていました（前までは怒りを表明することに躊躇していたのですが、最近は感情が先に湧いてきてしまいます）。世の中にはびこる様々な差別について意見を交わしていると、その大学生も「僕も差別的な社会構造に怒って

います」と話してくれました。頼もしいなあと感じました。同じ釜の飯を食うという言葉もありますが、想像力を膨らましながら問題意識を共有し、アクションを起こしていくこ

とが社会構造を変えていくのかもしれない。世の中の変化と多様性を考える作業は、ずっと続いていくと思われま

そんなことを考えながら、私はまた勤務先の小学校に向かいます。ある日、学校をお休みした先生がいたので、そのクラスに給食の補助に入りました。給食の準備でいろいろと指示を出していると、クラスの子どもたちから「〇〇先生と、やり方がちがう！」と冗談っぽく文句を言われました（学校の先生あるある）。私が「〇〇先生のやり方もあるし、シゲ先生のやり方もあるよね。どうかな？」と伝えました。するとある子が「それって、多様性だね」とつぶやきました。私は驚きながら「多様性って言葉、どこで覚えたの？」と聞きました。すると「テレビのCM」との答えられました。

先生も、大学生も、小学生も。アライも当事者も。大きな仲間も小さな仲間も手を携えたり、思いを共有したりしながら、これからもこの社会をよりよくしていきたいものです。

第31回

「差別的な社会構造に怒っています」 大学生とのやりとりから

31年前の官房長官は

米国には新しい大統領が誕生すると、最初の100日という蜜月期間があり、メディアも政権の発足から100日の間は政権批判を控えるという。

トランプ大統領の場合は、逆にご本人の方が最初から挑発的というか、メディアと対立する姿勢を示していたこともあって、やや例外的な印象だったが、伝統的にはしばらく様子を見ることが多い。

批判的な立場にあったとしても、まずはお手並みを拝見してからといったところだろう。

日本の場合はどうなのか。安倍晋三首相の退陣表明を受け、官房長官だった菅義偉氏が9月16日、内閣総理大臣に就任した。その船出の報道は、批判を控えるというところからもう少し踏み込んで、甘めの評価が多かった印象を個人的には受ける。仕事ができる布陣といったことが強調されていたが、新しい閣僚の顔ぶれは、首相ご自身の就任前の言葉とは裏腹に、大枠で言えば居ぬき内閣だったのではないかな。

菅内閣の唯一の弱点は、菅官房長官がいないことだという論評もあった。政界には、それほど人材が払底しているのだろうか。官房長官は毎日、記者会見を行うスポークスパーソンでもあるので、政府の顔と呼ばれることも多い。手堅いといわれる新長官の能力を疑うつもりはみじんもないが、ここは女性官房長官を起用して、「前例主義の打破」をアピールするぐらいの姿勢を示してもよかったように思う。

そもそも日本に女性の官房長官はいたのだろうか。歴代の顔ぶれを調べてみると、前例は少なくともゼロではない。唯一ではあるが……。

第一次海部内閣の1989年8月25日から1990年2月28日までのほぼ半年にわたって、「政府の顔」は森山真弓官房長官だった。

海部内閣は前任の首相が女性スキャンダルなどで短期に退陣に追い込まれ、緊急避難的な感じで1989年8月10日に誕生している。

森山長官は最初からこの内閣の官房長官だったわけではなく、新政権発足時点では環境庁長官だったのだ

が、その時の官房長官が2週間後には女性問題で辞任し、横滑り人事で森山さんにお鉢が回ってきた。

逆に言えば、おじさんであることが当然視されていた首相や閣僚が相次いで女性スキャンダルで倒れ、もう、ここまで来ちゃったらどうにもならないということまで追い込まなければ、女性に官房長官を託すなどということは考えられなかったのではないかな。

官房長官は大相撲の優勝力士に内閣総理大臣杯を渡すことも多い。ただし、日本相撲協会は、女性を土俵にあげないことは大相撲の伝統として、森山さんの長官時代には、この役割を担うことを断っている。

女性が土俵に上がることの是非は、これで一件落着いたわけではなく、その後もたびたび論争が起きている。2018年4月には巡業先の京都府舞鶴市で土俵に上がってあいさつしていた当時の舞鶴市長（男性）が突然、倒れた。たまたま居合わせた看護師ら3人の女性が心臓マッサージなどの救命措置を取ったところ、土俵から降りるようという場内アナウンスが数回にわたって繰り返されたことがある。

さすがにこれは行き過ぎだということで、日本相撲協会は「緊急時、非常時は例外です。人の命にかかわる状況は例外中の例外です」という理事長談話を発表した。それでも、あいさつなどで女性が土俵に上がることを認めたわけではなく、理事長談話はその点についてもかなり丁寧に言及している。個人的には苦しい説明のように感じられるが、評価が分かれるところなので、関心がおありの方は談話をお読みいただく（欄外アドレス参照）。

当コラム第31回『女性は1割の相場観』（2019年11月15日）でも紹介したが、「女性の活躍推進」が成長戦略の柱だった第2次安倍政権の7年余りの間、閣僚全体に占める女性の割合は、平均すると1割程度だった。最多で5人のこともあったが、おおむね2人の時期が多い。新内閣もこの点では見事に前例を踏襲し、前政権の継承をはかったということなのだろうか。



BOOK GUIDE

今月のブックガイド

歴史の地層に眠る性の営み

いっけん無味乾燥な過去の記録から、突如として生々しい人間の感情が立ち上がってくるのを目の当たりにしたことがある。私事ゆえ詳細は省くが、母が亡くなったあと遺族として戸籍謄本に目を通していた際、そこに記載されていた結婚と離婚の日付や出産日などと、生前に両親が語っていたことの記憶が一本の線に繋がり、知らなかった母の人生が立体画像のように立ち現れたのだった。

役所の棚に埃まみれで眠っている書類にかつて誰かが生きた日々が冷凍保存されているように、本書『性からよむ江戸時代』は、まさにそうした過去の記録から江戸の世の人々の心のありようを解凍しようとする試みである。著者の言葉を用いれば、「一人ひとりの名前を持った女と男の性の営みを、当事者たちの生活の現場に即して、人々が生きた痕跡の記録である史料のなかに探」っている。著者は学問の手法に実直ながら、まるで推理小説の探偵のように、当時の市井の女と男の機微を再現していく。

例えば、小林一茶。江戸時代にはさまざまな階層で多くの日記が遺されているにもかかわらず、そこで夫婦生活について記されたものはほとんどない。が、俳人の一茶は『七番日記』にそれを克明に記録していた。そこには妻とのセックスの回数、妻の生理日、妊娠、一茶が強精植物を採集したり服用したりした日付(!)などが記述されていて、それを、著者はご丁寧にも正確な年表に起こし、またそこに夫婦生活を避けるべきとされた日(親の命日など)などを重ね合わせてみる。そうして夫婦の交合のタイミングなどから、彼らの性生活にどのような意味合いがあったのかを分析していく。好事家のごとく微に入り細を穿った追求にいささかニヤニヤしてしまうのであるが、しかし、



性からよむ江戸時代 生活の現場から

沢山 美果子著
岩波新書
定価 820 円+税

そこから明らかになったことは、性行為の目的が、「子宝への願望=生殖のための性と性欲の充足=快楽としての性の両方を求める一方で、快楽としての性を戒める禁忌を意識する女と男の姿」だった。

あるいは、米沢藩の山村に暮らす庶民の夫婦の離別問題。夫側は、妻に不義があって生まれた子だから引き取らないとし、妻側はそもそも不義などなかったし、子どもも夫との間に生まれた子だと訴える。両者の対立は村を越え、藩の裁定までが仰がれる事態に。そこでは妻がそれ以前に身持ちが悪かったとか、夫婦関係がいつまであったとか…までが取り沙汰された。

著者はその事件のあらましを、村から藩に提出された「書付」や、当事者たちの事情を聴取した「口書」、藩による裁定の返書である「請状」から再構成する。両者の齟齬を検証し、推論により足りないピースを埋めることで、真実を取り出すことに苦心する。また、そうした出来事が公に記録された背景——幕府の政策、社会の再生産をめぐる考え方の変化などを重ね合わせて考察する。

この庶民の夫婦が生きた江戸時代後期には、「家」というものが民衆のなかにも成立し、その存続のためにも子どもや産む女の命を守る意識が生じ、墮胎や間引き、捨て子などの少子化への志向が芽生えたという。また幕府や藩は人口増加を目論み、人々の妊娠や出産に積極的に介入していく。そういう背景があったがゆえに、このような庶民の離婚劇が藩レベルで取り沙汰され、そこで公の文章に残されることになったのだ。

著者はこのようにして、歴史の地層に眠っていた庶民の性の営みを掘り起こし、江戸時代の性とは何か? というテーマに広げていく。これまで、とかく江戸時代の性は近代と比べてその豊穡さが強調されてきた。が、実際にその時代を生きた女と男から見えてくるそれは、権力関係や貧困のなかでよじれる女と男の生々しい姿であった。(作家 伏見憲明)



性教育アカデミー2020

日本性教育協会 (JASE) 協賛

〈教育・支援〉を再考するワークショップ

性教育をめぐる哲学的対話

2021年1月24日 (日)

会場 オンライン配信
 レクチャー 午前10時～午後3時半
 ワーク 午後 3時半～午後5時



講師

- 藤岡淳子 (大阪大学教授・司法犯罪心理学)
- 野坂祐子 (大阪大学准教授・発達臨床心理学)
- 吉田博美 (駒澤大学学生相談室・臨床心理学)
- 東 優子 (大阪府立大学教授・性科学)

参加費 6,000円

キャンセル不可。都合により当日参加できない場合も、生配信終了後1週間程度、録画(ただしレクチャーのみ)を視聴していただくことが可能です。

参加方法

1. 参加をご希望の方は、①お名前、②ご所属、③連絡先(メールアドレス)を事務局・吉田までお送りください。【一次締切：12月25日(金)】
2. 銀行口座情報をお送りしますので、1月10日までに
お振込ください。
3. 入金が確認できた登録者のメールアドレスに、事務局より当日(生配信)用のURLをお送りします。
4. 生配信終了後、登録者全員に録画を視聴するためのURLをお送りします。



申込み・問い合わせ先 (SEE事務局) : kansaishy@gmail.com

2006年から、日本性教育協会 (JASE)の委託で「関西性教育研修セミナー」を企画・運営。10年を経た頃、それまでの経験と実績を活かし、より広く性教育の学びの場を提供していくことを目的として「SEE教育アカデミー」をスタートさせ、以来、海外スタディツアー (ハワイ、フィンランド、メキシコ)なども企画。過去の活動については、『関西性教育研修セミナー10周年記念誌性について、語る、学ぶ、考える』(日本性教育協会, 2017)をご参照ください。

ちなみに、2006年の記念すべき第1回セミナー「子どもの性の安全・性の健康」の講師は、今回と同じ、藤岡淳子教授でした。

Sexuality Education and Empowerment

性教育を次世代へ
性の健康をすべてのひとに

SEE教育アカデミー
January 24 2020

藤岡淳子 / Junko FUJIOKA, PhD 大阪大学大学院・教授 (専門：司法犯罪心理学)。少年鑑別所、少年院、刑務所で20年間、非行少年・受刑者の査定と教育に携った後、2002年から現職。専門は、非行・犯罪心理臨床。現在は、児童相談所、児童自立支援施設、刑務所などで、非行や犯罪行動のある少年と成人の教育プログラムの実施およびスーパーバイズを行うほか、一般社団法人もふもふネット代表理事として、コミュニティにおける性暴力への介入実践を行っている。著作は、「性暴力の理解と治療教育」(誠信書房)、「アディクションと加害者臨床」「治療共同体実践ガイド」(いずれも金剛出版)、「司法・犯罪心理学」(近刊：有斐閣)など多数。

東優子 / Yuko HIGASHI, MSW, PhD 大阪府立大学大学院・教授 (専門：性科学・ジェンダー研究)。フルブライト奨学生として留学したハワイ大学大学院でソーシャルワークを専攻すると同時に、性と社会太平洋研究所 (PCSS) でミルトン・ダイヤモンド博士に師事し、性科学を学ぶ。WAS (旧・世界性科学学会) 役員。日本性教育協会 (JASE) 運営委員。SEE共同代表。

野坂祐子 / Sachiko NOSAKA, PhD 大阪大学大学院・准教授 (専門：発達臨床心理学)。臨床心理士。トラウマインフォームドケアの観点から、性暴力への介入や研究を行う。日本性教育協会 (JASE) 運営委員。特定非営利活動法人ふれいす東京・スタッフ。一般社団法人もふもふネット・スタッフ。SEE共同代表。

吉田博美 / Hiromi YOSHIDA, PhD 駒澤大学学生相談室・常勤カウンセラー (専門：臨床心理学)。臨床心理士。武蔵野大学心理臨床センター客員研究員。性暴力・性虐待被害者の心理療法を行う。米国ペンシルベニア大学不安障害治療研究センター認定Prolonged Exposure Therapyスーパーバイザー/セラピスト。SEE事務局長。

10:00	15min	イントロダクション・動作確認
10:15	30min	講義1「正しい知識・正しい理解」をめぐる哲学的問い (東優子)
10:45	30min	ダイアログ1 (藤岡×野坂×吉田)
11:15	5min	Break (休憩)
11:20	30min	講義2 セクシュアル・プレジャーと性の権利 (東優子)
11:50	30min	ダイアログ2 (藤岡×野坂×吉田)
12:20	40min	Break (休憩)
13:00	60min	講義3 グッドライフにつながる関係性・性的同意 ーポジティブ・アプローチからー (藤岡淳子)
14:00	60min	講義4 教育・支援の現場で起こること (野坂祐子・吉田博美)
15:00	10min	Break (休憩)
15:10	15min	ダイアログ4 (藤岡×東×野坂×吉田)
15:30	90min	グループワーク (参加者全員)
17:00	—	終了



性科学ハンドブック Vol.13

好評発売中!

岩室紳也と早乙女智子の もっと知りたい性のこと

岩室紳也・早乙女智子著

◆ A5判 : 138頁 頒価700円

『現代性教育研究ジャーナル』2014年4月号～2017年3月号に連載した「もっと知りたい女子の性／もっと知りたい男子の性」に、加筆・訂正して再構成したものです。

主な内容

- part 1 多様な性／「性」を科学する難しさ／女は女として生まれない／性別違和／ジェンダーバイアス・ジェンダーギャップ ほか
- part 2 女性の性／陰VAGINAはくぼみである／女子もします！ マスターベーション／人工妊娠中絶と女性の身体権 ほか
- part 3 男性の性／「包茎」を科学する／男子はおちんちんで育つ／「男」は環境で育つ性／男性の性機能って何？ ほか

著者プロフィール

岩室 紳也／泌尿器科医。ヘルスプロモーション推進センター（オフィスいわむろ）代表。AIDS文化フォーラム in 横浜運営委員。
早乙女智子／産婦人科医。公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター研究員、日本性科学会副理事長。セックスセラピスト。

既刊（性科学ハンドブック）

☆性科学ハンドブック Vol.11『思春期の性衝動～男の子の性を考える～』A5判・78頁 400円

☆性科学ハンドブック Vol.12『腐女子文化のセクシュアリティ』A5判・96頁 500円

※送料等は、ホームページを参照してください。

◆ JASE ホームページ <https://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。

または、Email info_jase@faje.or.jp

TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478



「青少年の性行動／日中比較研究」報告書 2019

30年ぶりに刊行できた本書が、経年調査の比較を含めて、両国の青少年の性意識・性行動の実態を把握できる唯一の報告書です。

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第8回青少年の性行動全国調査」委員会内日中比較小委員会
協力／日本青少年研究所・上海社会科学院社会科学研究所

今回の日本における調査に際して他国との比較研究を検討し、上海社会科学院社会科学研究所の協力のもと、中国の青少年の性行動に関してほぼ同一の質問用紙にて調査が実現しました。調査地点は、北京・上海・広州の3地域であり、調査期間は2017年10月から2018年3月までで、調査対象者は中学生・高校生・大学生合計約5000人です。

〈主な内容〉

- 序章 調査の概要
- 第1章 性行動
- 第2章 性イメージの日中比較
- 第3章 避妊行動の日中比較
- 第4章 中国の若者の性行動とその動機
- 第5章 性の情報源の日中比較
- 付表・中国の青少年の基礎集計表



頒価：1,000円

B5判102ページ



すぐ授業に使える

性教育実践資料集

中学校改訂版

ロングセラー『性教育実践資料集〈中学校版〉』の改訂新版です。性教育の経験が浅い先生でも、すぐに計画立案・授業実践が行えるように、実践例をもとにした具体的な指導案と教材・教具を多数紹介しています。個別の指導事例や学校・地域社会での指導事例、現代の学校における性教育の考え方、進め方もよくわかります。

〈主な内容〉

- 第1章 中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）
- 第2章 性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）
- 第3章 指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／8つの1年生の指導事例／6つの2年生の指導事例／6つの3年生の指導事例／7つの個別指導事例／5つの組織の指導事例）
- 第4章 参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）



本体 2,000 円+税 B5 判・224 ページ

好評発売中！

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！

「若者の性」 白書

第8回 青少年の性行動全国調査報告

全国の中学生・高校生・大学生を対象にし、1974年から6年ごとにおこなわれてきた「青少年の性行動全国調査」。第8回(2017年)調査をもとに、青少年の性にかかわる実態にどのような変化が起こっているのか? などを的確にレポート。検討・分析のための貴重な論文・データ書!

主な内容

- 序章 第8回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化
- 第2章 青少年の性規範・性意識からみる分極化現象
- 第3章 家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか
- 第4章 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題
- 第5章 青少年の性行動と所属集団の性行動規範
- 第6章 青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性
- 第7章 性的被害と親密性からの／への逃避
- 第8章 青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～
- 附表Ⅰ 「青少年の性に関する調査」調査票
- 附表Ⅱ 基礎集計表(学校種別・男女別)

*コラム

- 1 …性情報について
- 2 …性教育をめぐる近年の社会的動向
- 3 …LGBT学生について
- 4 …男性の性的被害
- 5 …「青少年の性行動全国調査」の困難と課題



**好評
発売中!**

本体2,200円+税
A5判 256ページ

編 / 一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行 / 小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます!